授精戦略の計算 その４
～ 目標授精頭数の決定 まとめ ～

かやの

これまで

１月の M 情報から３回にわたって授精戦略の計算ということでお話をしてきました。月間の授精頭数を決めるためには月間の「分娩頭数からの逆算」という考え方が必要となります。そのうえで、後継牛確保のための戦略をどのようにとるかで授精の種類（メス種／通常／Ｆ１など）が変わってくることを述べました。今回はこれまでのことを踏まえて、同じ農場でも戦略によって違いが出るということをよりわかりやすくまとめてみようと思います。

ターゲット農場A

さて、考える農場はこれまでと同様右の A 農場です。計算に必要な項目は右横に示しています。こうした項目は農場ごとにもちろん異なりますが、簡単に調べられる数値だと思います。何度も書いている通り、計算に必要なものは基本的にたったこれだけで OK です。

A 農場

経産牛頭数	150
分娩間隔	13
妊娠損失%（流産等）	10
初産分娩月齢	24
育成牛の淘汰率%(年)	10
牛群の更新率%(年)	30

月に必要な妊娠頭数／後継牛

計算式等は１月号に詳しく書いていますが、150 頭経産牛頭数を抱える A 農場を維持していくのに必要な月間分娩頭数は約 13 頭です。さらに、牛群維持に必要な後継牛（ホルメス子牛）は月約４頭必要です。これらをどのように確保するのか、“How to”のアプローチは一つではありません。

授精戦略　パターン別まとめ

月の授精戦略について、いくつかのパターンを下の表にまとめます。

	授精種別				予定産子			
	通常	和牛	性判別	合計授精頭数	ホル♀	ホル♂	F1	合計産子数
パターン①	33	0	0	33	6	6	0	12
パターン②	20	14	0	34	4	4	5	13
パターン③	0	26	13	39	4	0	9	13

※通常精液の受胎率を 40%、F1/性判別精液の受胎率が 35%と仮定

通常精液、和牛精液、性判別精液（メス種）と使う割合が異なり、月の合計授精頭数も変わってきます。一方で、予定合計産子数は 12～13 頭でほぼ同じ子の数（分娩頭数）を確保することができます。

近年であれば ET も普及しているので、後継牛を確保したうえで、残りを個体販売に回すというイメージで授精戦略を立てるのであれば、和牛精液を移植に置き換えたり、授精種別に和牛 ET を追加するのもかなりアリだと思います。もちろん、その際に受胎率や授精・移植料金を考慮することは必要ですが。

授精戦略は考え出すとキリがない

とはいえ、受胎率は常に一定というわけではありません。季節や飼料、牛群の産次やステージの状況によって変化します。さらに授精に係るコスト（精液代等）も様々です。ある程度えいやっ！とおおざっぱに授精ポートフォリオのようなものを決めて、定期的に見直すことが必要だと思います。後継牛が確保できているのであれば、販売用の授精/ET を増やすことも検討すべきですし、その逆もしかりです。現在の農場の授精戦略においてなにがベストなのか？・・・考え続けることが近道なのかもしれません！